

ソーシャルワーク専門教育の教材研究（2）

—映像メディアの活用実践教育—

神波幸子・佐々木政人

Study of Teaching Material for Social Work Professional Education and Practice (2) Developing Competency - Based Curriculum in Social Work Education and Practice (2)

—Introducing and Using Movies as Teaching Materials—

Sachiko Kounami and Masahito Sasaki

要旨：ソーシャルワーク専門教育の教授法及び教材開発を目的として 2004～2008 年度前期までの神波・佐々木の社会福祉援助技術演習の履修学生を対象とし、各福祉分野の相談・生活援助の対象となる利用者・クライアントの生活上の出来事や危機的出来事、それに伴う家族関係や家族をとりまく社会関係との相互関係等ライフモデル（生活モデル）を理解する教材として、映像・図書を活用した授業展開を試みた。特に、本稿ではソーシャルワーク専門教育に映像メディアを活用することの効果について報告している。

Keywords： ソーシャルワーク教育、教材、映像、できごと・危機、家族

Social Work Education, Teaching Materials, Movies, Life Events, Crisis, Family

1. はじめに

ソーシャルワーク専門教育（社会福祉援助技術演習：（現）相談援助演習＜愛知淑徳大学の科目名は社会福祉演習＞）の授業は、2・3年の2年にわたり基礎編から応用編へと学習内容を積み上げていく授業形態をとっている。カリキュラムとして、学生は、1年次に各福祉分野の基礎的知識（価値・倫理を含む）を修め、2年次において、初めて学んだ知識と具体的支援・援助法との統合を学ぶ。3年次の社会福祉実習実践において、知識・技法（理論）と実践（社会福祉実習）との統合を試み、この体験的な学びを再び授業の場で理論的検証を行い、実習現場で体験した事例を基にソーシャルワークの専門的価値・知識・技術について再学習し、映像活用や事例研究等で応用力を身につけていくこととしている。

本研究では、研究課題である（1）学生が、生活課題・人生の危機についての具体的理解と関心を示すこと（2）対人援助技法に関する学びの難しさを感じると同時に、事例への汎用性を理解すること（3）ソーシャルワーク実践が抱えている複合的な価値葛藤の存在に気づくと共に、援助専門職者としての視点を構築するための教授法を、筆者らの演習クラスの学生を対象とし、映像メディアの特性である具体性・共感性、映像のもつ潜在的教育力などを活用することで、2年次から3年次の演習において学生がどのように学んでいくのか、探索的リサーチ法を用いて研究を行った。その結果映像メディアの活用は、ライフサイクル上の生活課題（出来事・人生の危機）特に、生活課題・人生の危機についての具体的理解と関心を示すことや、学生の自己への気づき、何が大切なことなのかという価値への気づき、学生間のディスカッションを通して、学生個人々の思いや心の変化、影響などを読みとることができた。加えて、対人援助職やその技法に関する学びの難しさを感じるなどにおいて、ある一定の効果があることがわかった。

2. 研究方法 : 探索的リサーチ法

(1) 研究目的

社会福祉士という専門職者の資質として、①何らかの生活障害を抱えている方及びその家族の問題を的確に把握し、適切な相談援助ができること、②援助を必要としている方の人権の尊重、権利擁護、自立支援などの視座に立った相談援助ができること、③他の保健・医療分野及び他の福祉機関と連携し、協働して相談援助できること、④自らの資質向上のための自己研鑽などが求められている。しかし、社会福祉士養成の教育現場では、対人援助職の基礎となる資質、人とかかわることやコミュニケーション能力の低さ、自己表現力及びディスカッション能力の低さが目立つ。これは本学学生のみならず、最近の学生の傾向ともいえる。対人援助職に従事する学生の養成を行う教育現場においてこれらの能力・力をどのように育てていくか、教員の責務でもある。そこで本研究は、社会福祉従事者としての福祉の専門的倫理・価値・知識・技術を学ぶ基礎編において、その演習授業をどのように組み立て、授業展開をしていくことがのぞましいかを、教材として活用してきた映像・図書から得たデータを整理・分析し、その教育効果の有無を探るとともに、これらの教材から①学生がどのように社会福祉援助技術演習（社会福祉演習）を学んでいくか、そのプロセスを探求していく。また、②これらの各教材が社会福祉援助技術演習（社会福祉演習）の授業内容のねらいと学生の学びとがどのように交差しているかを検証していく。③今後これらの教材をどのように活用していくか、またどのような方法をもちいれば学生の他者への関心、コミュニケーション能力、自己表現力及びディスカッション能力を高めていくことができるのかなどソーシャルワーク専門教育（社会福祉援助技術演習）の教授法及び教材開発の一つの手がかりとすることなどを研究の目的としている。

(2) 研究対象

2004～2008 年度前期までの神波・佐々木の社会福祉援助技術演習の履修学生延 200 人の各福祉分野の生活援助・相談の対象となる利用者・クライアントの生活上出来事や危機的出来事、それに伴う家族関係、家族を取り巻く周辺の人々との社会関係及びその相互関係、援助者としての立場からの視点等について、ワークシートの整理・分析を行った。

(3) 研究内容

60 本の映像メディアから、特に各福祉分野の相談・生活援助の対象となる利用者・クライアントの生活上の出来事と危機、その相互関係について、「いまを生きる」：自殺・親子の亀裂、「心の旅」：中途障害・夫婦の危機、「海辺の家」：がん・薬物依存、「モリー先生の火曜日」：死・ALS、「アイアム・サム」：障害者の子育ての危機・子の知的能力が親の知的能力を超えるなど、5本の映像を教材映像として用いた。研究課題である（1）学生が生活課題・人生の危機についての具体的理解と関心を示すこと（2）対人援助技法に関する学びの難しさを感じると同時に、事例への汎用性を理解すること（3）ソーシャルワーク実践が抱えている複合的な価値葛藤の存在に気づくと共に、援助専門職者としての視点を構築するなどを考慮しながら授業計画・授業内容に組み込み、特に学生の学びのプロセスにも注目し、そこから一つの教授法を探求していく。

3. ソーシャルワークの教授法と映像

研究の仮説としては、ソーシャルワークの専門教育（社会福祉援助技術演習）の授業計画・授業内容に映像、課題図書を用いた授業展開を行っていくことで、対人援助において経験する出来事、ある意味、自分自身も体験しているかもしれない、また、誰もが思い当たる生活上の出来事を相談・生活援助という枠組みの中で捉えなおし、援助者としての目線からアセスメントすることを学ぶには映像メディアは一つの効果的手法ではないかと考えた。

筆者らは、ソーシャルワークの専門教育（社会福祉援助技術演習）の基礎編では、授業開始 3 ヶ月は、まず、学ぶ者同士の信頼関係の構築のための仲間作り、クラスにおいて誰もが居心地がよいと思う環境作りに力を入れている。例えば、参加意識（動機づけ）を高めるために各自に授業出席カード

を作成する（時には自己アピールも記入する）ことを課す。自己紹介では、グループメンバーを数回変えながら何度も繰り返し行い、どういうメンバーがこのクラスに参加しているかをメンバー全員が理解できるようにすること、グループメンバー間での情報交換、また、テーマに沿ったディスカッションを毎回仲間を換えて行うことなどである。その後、ライフヒストリー、マッピング技法などを取り入れながら自己覚知（自分をふりかえる）に関する授業を展開している。この段階での映像は、「いまを生きる」を用い、自律・自立、自分のやりたいことは何かを各学生に問いかける形式で行っている（問題・課題の提起～考え・論じる～自己覚知～自己表現と他者理解（メンバーから学ぶ）～プレゼンテーション）。グループとしての凝集性が出てきた段階では、コミュニケーション技法（マイクロカウンセリングに沿って）に進み、事例を通して言語・非言語的コミュニケーションの意味、面接技法の習得（傾聴技法の学びには映像：モリー先生の火曜日を活用）、また、実際にソーシャルワーカーの専門職者としての業務や利用者・クライアントへの関わりを学ぶ映像として「面接の招待」を用いている。援助・支援という概念が少し理解できたと思われる段階での映像は「心の旅」・「海辺の家」を用い、これらの映像から生活上の出来事や危機的出来事を通して、家族関係、親子・夫婦関係・職場の人間関係、障害者と職場・仲間関係、専門職者との関係、ターミナルケアなどをテーマとして、考え・論じる授業を行っている。また、それぞれの“できごと”に対して、“援助者として主人公（利用者）にかかわるとしたらどのようにかかわっていくか、活用できる社会資源は何か”についてディスカッションしていく。その後、それではなぜ福祉という考え方が必要とされるのか、対人援助者に必要とされる倫理・価値とは何かを考える授業展開につなげている。

基礎のまとめとしては、映像「アイアム・サム」を活用し、人間観、福祉観、クライアントとの信頼関係形成に伴うコミュニケーション、面接技法、マッピング技法（ジェノグラム、エコマップ）、ニーズの捉え方、アセスメント、援助の在り方、社会資源の活用法を習得することになっている。

応用編の3年次においては、ソーシャルワークの展開方法と各展開期における留意点を押えながら分野別の事例から援助の在り方を学ぶとともに、ニーズ・インテーク・アセスメント・援助計画・介入などソーシャルワークの展開プロセス及び展開プロセスで用いる援助技術の確認を行うことを授業の柱としている。

ソーシャルワークの専門教育を学ぶ映像としては、上記に記した映像の他、社会福祉の理念であるQOL・ノーマライゼーション・自立支援・エンパワーメント・権利擁護を基盤とし、生命・人権・職業倫理・福祉の価値観、自己覚知、家族関係、障害・病気の理解、虐待、聴く、自律・自立、ソーシャル・ネットワーク、時代の文化（近隣につながり）、各福祉分野の歴史と援助、支援の実態、勇気、共感、思いやり、人間の知恵（特に高齢者の知恵）、愛すること、死ぬということ、社会資源活用などを学ぶという視点から次の映像をリストアップしている。

（1）社会福祉援助技術演習（社会福祉演習）を学ぶ映像リスト

以下の映像は2008年4月から2009年12月末までにリストアップした60本である。映像のリストアップにおいては学生の学習を円滑に進めるためにも同時に本も発行されていることにも留意した。闇の子供たち・夜と霧・葉っぱのフレディ（CD・アニメ）・ぼくの神様・チョコレート・マザーテレサ・コルチャック先生・マラソン（自閉症）・オリバーツイスト・学校・学校Ⅱ・学校Ⅲ・クレイマー・クレイマー・息子・ジュノ・長い散歩・ぐるりのこと・歩いても歩いても・西の魔女が死んだ・パパにさよならできるまで・翼のない天使・誰も知らない・海辺の家・心の旅・泥の河・1リットルの涙・ドンボスコ・マグダレンの祈り・少年15歳（教護院：自立支援施設TV）・アイアム・サム・フォレストガンプⅠ・機関車先生・いまを生きる・グッドウィルハンティング・サイダーハウスルール・結婚の条件・カーラの結婚宣言・いま会いにゆきます・半落ち・博士の愛した数式・象の背中・明日の記憶・男はつらいよ（寅次郎純情編）・白い犬とワルツを・きみに読む物語・レナードの朝・至福のとき・殞の森・萌の朱雀・おくりびと・モリー先生の火曜日・ALWAYS 3丁目の夕日・続ALWAYS 3丁目の夕日（昭和30年代 団塊世代のこども、近隣関係）・東京タワー／オカンとボクと、

時々オトン(団塊世代の子供～大人になる文化)・母べえ(昭和15～16年)・家族(昭和30年代)・トウキョウソナタ・マルタのやさしい刺繍・ディアドクター等である。

これらの60本の映像を授業全体の基礎となる1)命・人権・尊厳・差別に関する映像、2)時代背景・社会生活・文化に関する映像(特に昔の家族の風景・親子関係を学ぶものや、今後団塊世代の高齢者援助する上で、団塊世代の幼少期・児童期、青年期を理解するための生活文化、近隣社会を理解する映像である)、3)福祉分野別に関する映像に区分し、4)出来事と映像としては、E・Hエリクソンのライフサイクルにそって整理してみた。

1) 命・人権・差別に関する映像

社会福祉演習及び各福祉分野の基本となる、福祉哲学的視点、専門職者としての倫理・価値への学びや、自己の人間観・福祉観のふりかえりを行うための映像としては、闇の子供たち、夜と霧、葉っぱのフレディ(CD・アニメ)、ぼくの神様、チョコレート、マザーテレサ、コルチャック先生、泥の河、オリバーツイスト、モリー先生の火曜日、半落ちなどがあげられる。

2) 時代背景・社会生活・文化に関する映像

援助活動において、援助対象となる方は、援助職者と同じ時代を生き、生活している者とは限らない。そのため、学生が、対象者(利用者・クライアント)が暮らしてきた時代や文化、生活様式等の違いを理解するために、時代背景が学べる映像と考えてリストアップしたものは、次の映像である。特に超高齢社会の構成員である団塊世代の文化、生活様式を理解することが今後必要不可欠となる。

1940年代(昭和15～16年)の日本の家族、家族の置かれている社会的背景を学ぶ映像としては、母べえ、殯の森がある。また、1960年代(昭和30年代)の地域・近隣のつながりや生活、そして、1967年代～1970年代団塊の世代の文化を学ぶ映像としては、東京タワー／オカンとボクと、時々オトン、ALWAYS3丁目の夕日、続ALWAYS3丁目の夕日、ディアドクターがある。

次に福祉分野別(援助対象者別)に60本の映像を整理すると以下のようなものである。映像の見る視点においては各分野にまたがり活用できるため、各分野で活用可能な映像は重複して記載している。

3) 福祉分野別に関する映像

① 児童・家族福祉分野

少年15歳(教護院：自立支援施設TV)、ALWAYS3丁目の夕日、続ALWAYS3丁目の夕日、西の魔女は死んだ、博士の愛した数式、アイアム・サム、海辺の家、パパにきよならでできるまで、長い坂、半落ち、いま会いにゆきます、母べえ、オリバーツイスト、トウキョウソナタ、ドンボスコ、長い散歩、結婚の条件、カーラの結婚宣言、翼のない天使、誰も知らない、ぐるりのこと、歩いても歩いても、ジュノ、クレイマークレイマー、息子、オリバーツイスト、心の旅、グッドウィルハンティング、サイダーハウスルール、東京タワー／オカンとボクと、時々オトン、家族

② 障害児・者福祉分野

フォレストガンプⅠ、学校・学校Ⅱ、学校Ⅲ、アイアム・サム、博士の愛した数式、カーラの結婚宣言、マラソン(自閉症)、機関車先生

③ 高齢者福祉分野

半落ち、レナードの朝、長い散歩、萌の朱雀、殯の森、西の魔女は死んだ、博士の愛した数式、男はつらいよ(寅次郎純情編)、モリー先生の火曜日、東京タワー／オカンとボクと、時々オトン、至福のとき、白い犬とワルツ、マルタのやさしい刺繍、ディアドクター、きみに読む物語、おくりびと、明日の記憶

④ 女性福祉分野

マグダレンの祈り(1964年～1996年 アイルランド 婦人更生施設の実態)

⑤ 低所得者等福祉分野

マザーテレサ、学校、トウキョウソナタ(中途解雇・失業)

⑥ 医療分野（死・ターミナルケアを含む）

象の背中、1リットルの涙、ディアドクター、海辺の家、明日の記憶、いま会いにゆきます、葉っぱのフレディ、モリー先生の火曜日、東京タワー／オカンとボクと、時々オトン、博士の愛した数式

4) ライフサイクルと映像（出来事と映像）

今回の教材としてリストアップした 60 本の映像を E・H エリクソンのライフサイクルにそって、表 1 のように整理してみた。その結果、1 本の映像でも出来事の切り口をライフサイクルのどこの時期・段階に焦点を合わせるかで各時期・段階に応用できることがわかる。（表 1）

発達段階		映 像
第一段階・幼児期	希望(基本的信頼:不信)	アイアム・サム、ドンボスコ、コルチャック先生、葉っぱのフレディ、長い散歩
第二段階・児童初期	意志(自律:恥・疑惑)	ぼくの神様、アイアム・サム、ドンボスコ、コルチャック先生、パパにさよならできるまで、闇のこどもたち、長い散歩
第三段階・遊戯期	決意(自発性:罪悪感)	ぼくの神様、アイアム・サム、コルチャック先生、西の魔女は死んだ、クレイマークレイマー(6歳)
第四段階・学童期	才能(勤勉性:劣等感)	ぼくの神様、アイアム・サム、ドンボスコ、学校Ⅱ、コルチャック先生、マラソン[自閉症)、オリバーツイスト、いま会いにゆきます、クレイマークレイマー、西の魔女が死んだ、パパにさよならできるまで、翼のない天使
第五段階・思春期	忠誠心(アイデンティティ:混乱)	いまを生きる、心の旅、海辺の家、ドンボスコ、少年15歳、学校Ⅲ、グッドウィルハンティング、サイダーハウス・ルール、息子、学校、学校Ⅱ、1リットルの涙、泥の河、フォレストガンプⅠ、東京タワー(オカントボクと時々オトン)ジュノ、マグダレンの祈り、カーラの結婚宣言、誰も知らない、至福のとき
第六段階・成年前期	愛(親密性:孤独)	ドンボスコ、マザーテレサ、チョコレート、サイダーハウス・ルール、半落ち、ALWAYS 3丁目の夕日、続ALWAYS 3丁目の夕日、結婚の条件、いま会いにゆきます、母べえ、カーラの結婚宣言、マラソン、機関車先生
第七段階・成年期	世話(生殖性:自己投入)	心の旅、アイアム・サム、ドンボスコ、マザーテレサ、コルチャック先生、博士の愛した数式、半落ち、学校Ⅲ、家族、象の背中、海辺の家、明日の記憶、結婚の条件、歩いてても歩いてても、ぐるりのこと、クレイマークレイマー、トウキョウソナタ
第八段階・老年期	英知(統合:絶望)	明日の記憶、モリー先生火曜日、学校男はつらいよ(真次郎純情編)、マザーテレサ、コルチャック先生、白い犬とワルツ、きみに読む物語、長い散歩、西の魔女が死んだ、萌の朱雀、殯の森、レナードの朝、東京タワー(オカントボクと時々オトン)、葉っぱのフレディ、マルタのやさしい刺繍、ディアドクター、おくりびと

(2) ソーシャルワーク専門教育における映像を用いた授業展開

前述しているように、基礎編は、学生がはじめて、援助技術を体得していく導入部分であるため、信頼関係、面接技術などの学びにロールプレイや映像を用いつつ、何らかの生活問題・課題を抱えた主人公を通して、専門職者としての価値観(人間の固有生、尊厳)、倫理観(専門職者としての価値観)の確認と自己覚知、親子関係、家族、自助グループ、障害者の子育て、地域の中で障害者が生活(就労・近所付き合いなど)するという、地域にある社会資源活用の必要性について考えるという学

びを提供している。そこで、援助専門職者としての知識・技術の側面、特に信頼関係の構築、傾聴技法、マッピング技法（ジェノグラム・エコマップ）、ライフヒストリー、ソーシャルワーカーの援助法、援助者の自己開示等を考える教材映像として、筆者らは、「いまを生きる」、「心の旅」、「海辺の家」、「モリー先生の火曜日」、「アイアム・サム」の5本の映像を用いた。

これらの映像は、授業前半、中間・後半という3つの時期に分けて活用した。

筆者らの援助に関する理論的基盤はライフモデルで、家族を全体的に捉え、家族システムを形成している人間相互の関係特性とその構造を理解するための家族構成員、家族の現状、家族機能・役割、家族の情緒的雰囲気、家族員の問題処理・解決能力などに視点を置く家族ソーシャルワークである。そのため、映像を用いた授業展開においては、家族構成員が互いに生活していく中で、個々の構成員がいろいろな出来事にぶつかりながらも家族構成員がエンパワーメントされながら家族が再構築され、家族機能が再生・維持・継続していくか。また、家族構成員や家族をとりまく人々を巻き込み、巻き込まれながら、互いにどのように成長・成熟していくか映像を通して、学生が何かを学んでくれることも期待し、大切にもしている。

1) 授業前半期

ソーシャルワーク専門教育の基本は、利用者・クライアントとの信頼関係の構築である。しかし、その前に、学生個人が自分という人間をどのようにとらえているのか、履修学生の年齢19~21歳までの自己のふりかえりを行い、自己の価値観の形成（人間の尊厳・尊重）、生活上の出来事に対する自己の感情と行動、出来事に対する問題処理能力などをどのように成長過程で身につけたのか、また、なぜ社会福祉を学ぼうとしているのか、自己覚知を中心として、自己表現、同世代間の出来事を通しての親子関係、仲間関係、自律・自立を問いかける教材映像として「いまを生きる」という映像を用いた。授業のねらいと学生の学びは表2の通りである。

映画のあらすじ

大学進学を目的にした教育が売り物の私立高等学校に赴任してきた、新しい考え方を持つ教師（教科書なんか破り捨てる、ものごとを多面的捉えろといい靴のまま教卓に上がり、まわりを見ろという）と学生の交流を描いたもの。「点取り虫」で「一流」大学を目指すことしか教えられていない学生に、新任教師は「君たちは本当に何がやりたいのか」と問いかける。演劇をやりたいことがわかったひとりの学生は、一流大学に入れたい父親の猛烈な反対に会い、結局自殺してしまう。

例) 映画からの学び

イ. 「いまを生きる」: 自殺する学生に対する父親の対応について、学生は主に次のようなことを記述している。

- ・ニール（自殺した学生）ももっとお父さんの気持ちを動かせるように、自分の気持ちを言えればよかったと思う
- ・父親が子供（ニール）の考え方を無視すべきではない
- ・父親は、ものすごい勢いで反対するだけで、子どもの気持ちを受け入れる気がなく、縛っている。子どもも途中であきらめずにもっと説得していれば、何か変わったかもしれない
- ・気難しいお父さんに仕えよく頑張ってきた。息子が死んでから“おお神様”なんておかしい。もっと後悔したらいい
- ・ニールの父親に対して、思い通りにならない息子の自殺を誰かの責任にするのはよくない
- ・何度も自分の意見を主張しようとしていたニールを自分の意見で押しえ込み、それが原因だったことも気づかない父親は間違っている
- ・息子のために、息子が何をしたいのかそれについて応援するべきである

- ・息子の話をもっと聞くべき
- ・父親の前では、結局自分を出すことができず「死」という手段をもって逆らった
- ・父親は、自分の言うとおりにさせることが幸せだと決めつけた
- ・息子の芝居をする目の輝きをみて、その真剣さを受け止めやるだけやらせみるべきだ
- ・父親は、息子に自分の反対を押し切ってほしかった

この親子関係を、あえて利用者（クライアント）と援助者という立場に置き換えると、利用者（クライアント）の話を聞く・聴く、利用者（クライアント）を受け止めるということ（受容）、利用者（クライアント）の個性・自己決定、感情の反映と援助者の非審判的態度について学ぶツールと考えられる。

ロ．学生が一番共感した人物

学生7人の登場人物のうちで、履修学生が共感した人物として挙げたのは、トッド、ヌア
ンダ、ニールであった。共感した理由は次のようであった。

- トッド : 気の弱いトッドが勇気を出し、先生に対して机にあがって立つという行為で自分のメッセージを伝えたこと。このことが、他の学生に勇気を与えそれぞれ学生が机に立ち、気持ちを教師に伝えたこと（非言語的メッセージの力、強さ）
- ヌア
ンダ : 裏切ったキャメロンを殴ったところをみて、強い意志を持っていると思いい好感がもてる。言いたいことを、思っていることをはっきり言ったり、行動にうつして、自分の生きたいように生きているところ（自己表現・自己主張）

ニール（自殺した学生）

: 自分のやりたいことを見つけ、演劇の舞台に立ったこと（自己決定）

2) 中間期

中間期ではマッピング技法、コミュニケーションの取り方などを学びながら専門職との関わりとは何かを考えるために、「心の旅」・「海辺の家」・「モリー先生の火曜日」の映像を用いた。授業のねらいと学生の学びは表2の通りである。

映画のあらすじ

①-1 「心の旅」

ヘンリー・ターナーは、ニューヨーク屈指のエリート弁護士、今日も大病院の失態の責任を救うと、訴えていた患者を後に裁判所を出た。家では毎日仕事で奔走するため、妻や娘と余り接点を持っていない。タバコを切らしたために深夜ストアに行き、そこに偶然居合わせた強盗に撃たれてしまう。エリート弁護士が、一発の銃弾により記憶を失うが、家族やさまざまな人々との心のふれあいを通して立ち直っていく。

この映画は、優秀な弁護士が突然強盗にピストルで撃たれることにより記憶・歩行障害となる。この映像から学生は、家族関係、父子・夫婦関係、職場関係、家族の障害受容、専門職者との出会い、自己開示、自己覚知、家族の再生、障害者の就労、経済（収入）と生活・住居（住まい方）などの問題を考えるという学びがあった。同時に人生において何が大切なのかという価値観、人生観に学生個人が立ち返るといふ学びがあり、日常生活の中での出来事、すなわち事故や病気をきっかけとして家族はどのように回復・再生していくのか、そのプロセスを学ぶ映像としても活用できた。

例-1) 学生の学び: 「家族」について

- ・家族がお互いの存在価値に気づきあうべき「家族」となった。ターナーの事件はこの家族にとって良かった出来事だ
- ・できごとからお互いの必要性や家族愛を確認できたこと

- ・最初、夫婦は冷え切った関係であったが、偶然居合わせた強盗に撃たれ記憶を失い障害を負うという出来事から妻・娘が夫・父親に寄り添い、支え合うことや心の内を話せる関係が生まれたこと

例一2) 学生の学び：「専門職者との出会い：自己開示の意味」

- ・PT（スポーツ訓練士）の自己開示は、ターナー（本人）を勇気づけ、本人の背中をドント押すような意味がある
- ・PTの自己開示のタイミングがよい
- ・職場の同僚・友人とうまくやっていくこと、仕事で成功する（優秀な弁護士として）ことに生きがいを感じていた以前の自分に対して、PTの“周りに惑わされることなく記憶に勝て”という言葉で、自分の人生や仕事に対する姿勢をふりかえるきっかけとなったこと
- ・PTの自己開示が、本人の心の障壁を取り除くということ

映画のあらすじ

①-2 「海辺の家」

時代に取り残された建築デザイナー、ジョージ・モンロー42歳。彼には既に再婚している元妻ロビンと16歳になる反抗期の息子サムがいる。ある日突然会社から解雇を言い渡された。その上、医者には余命3ヶ月であることを告げられる。このまま死んで悔いはないのか、残された時間で自分にできることは何か。彼は失ったものを取り戻すために、残りわずかになった命を愛する人のために捧げる決意をし、抵抗する息子とともに家を建てることにした。彼が心から望んだ最後の願いは一。

学生は、親子、薬物依存、家族の再生、ターミナルケアについて学んでいる。ここで、気づいたことは主人公のがんという病気について医療機関のMSWという立場から、どのような関わりができるというワークでは、医療機関のMSWに焦点は合わず、援助という大枠の中で捉えることにとどまっている。このワークでは、各福祉機関、施設のソーシャルワーカーの機能・役割、業務内容を紹介していくことが課題と気づいた。

映画のあらすじ

①-3 「モリー先生の火曜日」

スポーツコラムニストとして活躍するミッチ・アルボムは偶然テレビで大学時代の恩師の姿をみる。モリー先生は、難病ALS（筋委縮性側索硬化症）に侵されていた。16年ぶりの再会。モリー先生は幸せそうだった。動かなくなった身体で人ふれあうことを楽しんでいる。「憐れむより、君が抱えている問題を話してくれないか」と言い、モリー先生は、ミッチに毎週火曜日をくれた。死の床で行われる16年ぶりの、ふたりだけの授業が始まる。

ターミナルケアの技法の一つである傾聴技法を「モリー先生の火曜日」を活用した。この映像からは、援助者が対象者（クライアント・利用者）の声に耳を傾けて「聴く」という学びと、「聞く」と「聴く」の違い、筋委縮性側索硬化症（ALS）という病気、病気に対峙するモリー先生、死の意味について考える映像となった。また、教員側には「聴く」ことは、聴く側に成長と変化をもたらすものであることを学んでほしいという意図もあった。しかし、ここまで望むことは難しかった。

3) 後半期（まとめ）

授業後半のまとめには「アイアム・サム」を用いて、障害者の地域ケア、障害者の子育て、近隣・職場のサポートネットワーク、自助グループの支えあい、ソーシャルワーカーの援助の在り方、里親制度、エコマップなどの総復習の教材として用いた。また、この映像の出来事を日本という場に置き換え、地域で障害者及び障害者が子育て、生活するにはどんな社会資源が必要とされるかという総合学習に展開することができた教材である。授業のねらいと学生の学びは表2の通りである。

映画のあらすじ

「アイアム・サム」

7歳の知能しかもっていない父親、サム。コーヒーショップで働きながら、たった一人で娘のルーシーを育てている。楽しい仲間と囲まれて、幸福な日々を送っていたが、ルーシーが7歳を迎えると、サムは父親としての能力に欠けると判断され、ソーシャルワーカーによってルーシーを奪われてしまう。かけがえのないルーシーを失ったサムは、腕利き弁護士とともに、自分が父親としての能力を充分持っていることを証明するために、そしてルーシーとまた楽しく暮らすためには裁判に出ることを決意する。

まとめの時期に、この映画を活用した2005年~2007年の学生は、中間期・後半（まとめ）期の前期・後期に集中授業が組まれていたため、教材として映像は非常に活用しやすいこともあった。まとめとして、この映像を用いながら、ジェノグラム・エコマップの復習、人間の日常生活に起こる出来事、援助・支援とその展開を構造的に捉え、より具体的に援助・支援の対象者、問題の解決法への理解、問題解決のための社会資源活用に結びつけるという学びができた。また、この親子が日本の地域社会に暮らすとしたらどのような社会資源を活用できるかというソーシャルワークの応用を身につけることができた。

例－1）学生の学び：「ソーシャルワーカーの援助について」

- ・ソーシャルワーカー個人の価値観や常識で捉えているようで、サム親子の気持ちを理解しようとしていない
- ・娘ルーシーの将来のことを考えた援助だと思うが面会時間のもち方などを工夫したりとサムの気持ちも考えた方がよい
- ・サム親子が2人で暮らせるにどういった援助すべきかを考えるべきだと思った
- ・サム親子を引き離さない援助はなかったのだろうか
- ・当事者の話に耳を傾ける必要がある
- ・娘ルーシーのことを考えた措置だと思うが、人が人として生きていく上で一番大切なものは何なのかを逆にこの親子からソーシャルワーカーは学んだのではないか

例－2）学生の学び：「もしも自分が担当のソーシャルワーカーだとしたら、どんな援助をするだろうか」

- ・サムの子育てを尊重し、子育ての中でサムができないことを一緒にみつめていき、それを補う社会資源を紹介する
- ・サムの経済的支援、ルーシーの教育的支援、家事援助（ホームヘルパー）などの援助や、近隣、友人の見守り等で自立生活を支援したい
- ・ソーシャルワーカーが近隣・学校の先生と連携をとり、この親子の抱えている問題、不安、ニーズについて把握する
- ・当事者であるサム・ルーシーの話をよく聞き、一緒に暮らしたいという気持ちを尊重し、生活保護を利用したり職業などの相談にのる
- ・障害者の支援費制度の利用や父子家族を支援する制度の利用を考える
- ・地域にあるボランティア（学習ボランティア）の活用を考える

表2 学生の学び

	いまを生きる	心の旅	海辺の家	モリー先生火曜日	アイ・アム・サム
危機	<p>大学進学を目的とした教育が売り物の私立の高等学校に新しい教育の考え方もつ教師が赴任した。一流大学を目指すことしか教えられていないと学生に「本当に何がやりたいのか」と問いかける。この教師の影響を受けたある男子学生は演劇に目覚めたが、一流大学に入りたい父親の猛烈な反対にあい、父子関係に亀裂が深くなり結局この学生は自殺する</p>	<p>優秀な弁護士は、タバコを切らして近頃の深夜ストアに行き、そこに偶然居合わせた強盗に頭を銃で撃たれる。その結果記憶障害、失語症になる。家族の経済的危機、職場復帰するも以前のようにできない。事故以前は、妻・娘との接点があなかったが、リハビリを受ける過程で家族の関係が再生されていく</p>	<p>時代に取り残された建築デザイナージョージ・モンロー42歳。彼には既に再婚している元妻ロビン16歳になる反抗期の息子サムがいる。ある日突然会社から解雇を言い渡される。その上余命3ヶ月であると告げられる。このまま死んで悔いはないのか、残りわずかになった命を愛する人のために捧げる決意をし、抵抗する息子とともに家を建てることにする</p>	<p>スポーツコラムニストとして活躍するミッチ・アルボムは偶然大学時代の恩師の姿をみる。恩師はALS(筋委縮性側索硬化症)に侵されていた。16年ぶりの再会、恩師であるモリー先生は教え子の、ミッチ・アルボムと毎週火曜日に死の床での2人だけの授業が行われた</p>	<p>7歳の知能しかない父親サムが、コーヒーショップで働きながら一人娘を育てている。楽しい仲間に囲まれ幸福な日々を送っていたが、娘のルーシーが7歳を迎えると、サムは父親としての能力に欠けると判断されSWrによってルーシーは養護施設に一時保護されその後里親に預けられる。サムは、自分が父親としての能力をもっていることを証明するために、そしてルーシーとまた楽しく暮らすために裁判に出ることを決意し、腕利き弁護士とともに戦っていく</p>
教材としての活用	<p>導入:「あなたのやりたいことは何?」かと再考を促す。人を多面的に捉えるという意味とソーシャルワークにおけるクライアント・利用者を含め全体的にとらえる意味を具体的に理解すること</p>	<p>家族、家族関係について考える。PT、STという職種を理解する。ジェノグラムとエコマップ技法から個々の社会関係をみる。人との出会いから受けるもの、職場、職場の人間関係について考える。</p>	<p>家族とは、家族の再生、ターミナル期にある人及び家族へのかかわりについて考える。ジェノグラムとエコマップ技法を用いて、父親とその周辺の個々の社会関係をとらえる。がんを宣告された余命3ヶ月と告知された方の心理、生き方を考える。離婚した元家族が家族として再生していく力について考える</p>	<p>難病の一つであるALS(筋委縮性側索硬化症)の理解、聞くことと聴くことの違い、ターミナル期にある方の生き方</p>	<p>知的障害者への理解、知的障害者が子どもを育てること、児童養護施設、里親制度への理解、ピアカウンセリング、自助グループ、知的障害者が就労すること、ジョブコーチのあり方、父と娘(親子)の関係について考える</p>
援助視点	<p>子どもの自律に向けて、父子関係・自殺という問題について、まず援助の基礎となる信頼関係の構築においての自己表現の大切さ、個々人の気持ちを尊重すること、その中にある能力をどのように引き出すか(ストレス・エンパワメント)、個々の々人を多面的にみる(生活全体を把握する)、思春期における葛藤、親子関係への理解</p>	<p>ジェノグラムとエコマップ技法から家族や友人等の社会関係を考える。家族の再構築について、職場復帰について、専門職者との信頼関係、専門職者の自己開示の仕方、夫婦関係、父と娘の関係と専門職者との関わり</p>	<p>ジェノグラム、エコマップ技法の復習。家族構成員のエンパワメントについて考える。父親と息子の人間関係、父親が職を失うことと生活のありかたの変化について考える。ターミナルケア期におけるソーシャルワークについて考える</p>	<p>ターミナル期にある人に聴くとはどういうことか、自己覚知、自己の感情への気づき、ターミナル期にある人と家族、ヘルパー、友人関係等の在り方、援助・支援について考える</p>	<p>エコマップ技法を用いながら、地域社会の中で知的障害者が暮らすこと、仕事をもつこと、子育てすることを考える</p>
学生の学び	<p>どのように人の可能性、能力を引き出すか、個性を尊重することの大切さ、自己表現していくことの大切さ、本当に人にとって大切なものは何か、勇気と自殺、親との向き合い方について学び、考えるきっかけとなっている</p>	<p>家族の絆、リハビリをする過程での専門職者や家族の支え、素直に正直に生きていくことの素晴らしさ、エコマップからみた事故前と事故後の社会関係の広がりについて理解する。また、人が生きていく上で大切なものは何かを学ぶ</p>	<p>人はかわっていきけるということ、伝えることの大切さ、時間の大切さ、家族がまとまっていく過程、親子愛、家族愛・家族の存在、夫婦愛について学ぶ</p>	<p>人生の意味、生きるということ、最後まで全力で生きるということ、死を向かえる前でもできることはたくさんある、自分にとって大切なものへの気づき、死をまじかにしている人の時間の使い方。人間として大切なことは、人とのふれあいの中で自分をありのまま受け止めていくこと、老化は衰弱ではなく成長であるということを知る</p>	<p>父と娘の気持ちをまぎざきちんと把握し、どう暮らしを望んでいるかを理解することが大事なことで、SWrの援助の在り方や信頼関係の形成、知的障害者が地域で暮らすための福祉サービスなどの社会資源の活用について、障害者仲間や隣人との信頼関係と支えあうことを学ぶ</p>
学びの結果	<p>この映画を見ながら、今、自分がすべきことは何かを考えること、子どもの個性、自由、親との向き合い方考えるきっかけを学生に提供している</p>	<p>この映画を見ながら、家族の大切さ、大きさ、人はなんらかのきっかけで変わること、SWrの外の専門職種を理解し、専門職者の自己開示の仕方を学んでいる</p>	<p>余命3ヶ月といわれた主人公が自分の家を息子と建てることを通して息子・元妻及び家族との関わり、地域住民との関係づくりのありかたを学び、ターミナル期にある人との関わり方を学んでいる</p>	<p>この映画を見ながら、ALS(筋委縮性側索硬化症)を患った方のターミナル期の関わり方、ケアのありかた、家族や友人との関わり方、聴くとは何かを学び、聞いて何かをしてあげようと思えるのではなく、対等な立場でその方から様々なことを教えてもらっているという気持ちをもつことの大切さを学んでいる</p>	<p>この映画を見ながら、常識でなく専門職者として援助するということの学び、父と娘と仲間、隣人という視点から地域社会の中で暮らすにはどうすればいいのかという社会資源の活用の仕方まで視野を広げて考えることを学んでいる</p>

4. 映像メディアからの学生の学び

表2をみると、映像による学習は、親子関係の亀裂、自殺、人との信頼関係、仲間、事故、中途障害者となったことからの経済的危機、住宅の住み替え、職場復帰、親子・夫婦関係、地域での障害者及びその家族の暮らし、ターミナルケア等の出来事は理解しやすいようだ。また、生活体験の少ない学生にとっては、親子関係がうまくいかない、人間が事故や病気により人生の途上で障害者になり、職を失うということ、障害者の就労、親が障害者であることの困難性や生活のしづらさ、ターミナル期を迎えた人との関係の持ち方、関わり方等について、映像を通して、一つの出来事・人生の危機という問題からどのような諸問題が派生するか、引き起こされるかなどがイメージ化がしやすいようだ。また、授業初期は、ソーシャルワーカーとしてどのように関わり、どういう援助・支援を行うかという問いかけについては、援助者という視点よりも、父親が悪い、息子がかわいそうなど自己の感情を反映、投影する傾向が強かった。しかし、授業の中間期で用いた教材「海辺の家」では、がんと告知されたクライアント及びその家族に対して息子を中心とする人間関係を調整する、ターミナル期にいる人へのかかわり、ターミナル期を抱えた家族への援助に向けて考えることができるようになった。しかし、この時点では、「医療機関のワーカー（MSW）というがどのような援助展開をすればいいのか」という問いかけについては、誰をクライアントと考えるか、クライアントの援助をするに当たってのアセスメント、援助目標、援助計画を立てるという筋道を考えるというところまでは応用ができなかった。このことから、この時期の授業においては、各施設・機関の援助専門職者の機能と役割を考える機会と同時に施設・機関の機能、役割、援助目的にそった事例研究を並行して授業内容に組込んでいくことも課題の一つと言えよう。

後半のまとめの時期に用いた映像「アイム・サム」では、援助の視点を社会資源活用まで広げることができるようになった。

以上のことをみると、大よその授業のねらいは、映像を通して学生が学んでいると言える。しかし、映像による学習は、親子関係の亀裂、自殺、中途障害者、経済的危機、住宅の住み替え、職場復帰、親子・夫婦関係、地域の中で障害者及びその家族の暮らし、高齢者のターミナル等の出来事が視覚から入ってくるため、感情面に支配されやすい。そのためか、学生個々人がそこにソーシャルワーカーという立場に立つとしたら、どのような援助を行うかという問いかけにおいては、援助者という視点よりも主観的感想に終わってしまう傾向も見られた。

5. 映像メディア活用の効果

ソーシャルワークの専門教育に映像教材を用い、学生が伝えたいメッセージを絵にする作業や、ワークシートに添って話し合う（グループワーク）を繰り返すことで、クラスメンバーの凝集性が出てくること、また、グループメンバー間でのディスカッションは人の前で意見を言うことに消極的な学生が段階を踏んで力をつけていき、発言する勇気を持ち始め、表情の変化や少しずつ自信をつけていく光景も見られた。加えて、グループメンバー間でのディスカッションは、各映像が何を伝えようとしているかを確認していく作業にもなっている。また、毎回グループメンバーをチェンジしていくことで、ほぼクラスの全メンバーと関わる体験をし、学生自身がお互いにいろいろな意見をもった学生がいることを体験的学ぶ。この実践的体験を通して、他者と自分の違い、ひとりひとりの存在の固有性の価値を学んでいる。そして、事例集の事例を用いるよりも、映像を事例として活用することは、学生がその生活上の出来事の内容や、一つ出来事から他にどのような出来事が派生するか、出来事が社会関係にどのように相互に影響し合っていくかが理解しやすいようだ。これは映像の中の生活上の出来事や危機的出来事が、学生の頭で組み立て（構造化）やすく、具体的な理解を促し、援助・支援のイメージ化がしやすいからではないだろうか。さらに、生活体験の少ない学生が、いろいろな出来事や家族のタイプやその人間関係、人間の生きざまを理解すること、ソーシャルワーカー以外の職種を理解するうえでは有効のように思われる。

6. まとめ

ソーシャルワークの専門教育（社会福祉援助技術演習教育）は、ソーシャルワーク実践を行っていくための専門職者としての倫理・価値・知識を総合的に学習し、また、具体的に援助・支援するための面接技法、マッピング技法、援助方法論、援助展開法などを教授していく授業である。しかし、ソーシャルワーク実践が、多様な問題、ニーズを抱えた人々の生活上の出来事に対する相談・生活援助・支援方法である以上、生活上の出来事そのものへの理解ができていなければ生活問題を抱えた人々に寄り添う援助は難しいと考える。そのため、筆者らは映像メディアをソーシャルワーカー専門教育に活用することを試みている。その結果、（1）ライフサイクルに沿って起こるであろう生活課題・人生の危機についての理解を促し、援助・支援するということに関心を持ち始めたこと、（2）その出来事が招く利用者の新たな生活課題、例えば、家族関係、親子・夫婦関係、職場の人間関係、障害受容、障害者の就労、生活課題を抱えながら地域でくらすということ等について考えるきっかけを提供できたこと、（3）利用者・クライアントの問題・課題についてアセスメントすること、専門職者としての援助内容、専門職者の自己開示、傾聴の意味などを学ぶことができたことなどである。また、学生は、生活課題・人生の危機に直面した人々への援助の難しさも同時に学びながら、学生が将来専門職者として援助・支援することの意味と自己覚知を促す機会ともなった。

映像メディアの活用は、ライフサイクル上誰にも起こる可能性のある生活上の出来事への理解を基本としながら、現代の多様なニーズに応えるための援助者としてのスキル、方法論を教授し、実践活動に依拠した授業を展開していくには、生活体験の少ない学生にとっては、イメージ化しやすく、同時に相談、援助・支援することの意味を考えていく上では意義あるものと考えられる。また、筆者らは映像を通して生活課題を提起し（問題提起の教育）、学生が、出来事から何が問題なのかを整理しアセスメントすること（情報の整理・アセスメント・考える教育）、仲間で論じあい（論じる教育）、分かち合いながら議論し（自己表現）、グループや個人で生活課題・出来事からの影響について考え、これらをグループメンバーでまとめ発表することは、プレゼンテーションの演習につながっている。この授業プロセスの中で、専門職者としての基礎的な力を身につけ、履修学生個人がメンバーによって互いにエンパワーされていると言えるのではないだろうか。さらにソーシャルワークの専門教育（社会福祉援助技術演習教育）の場は教育・福祉実践の基盤を形成する場であることも実証できたのではないかと考えている。

また、その他として映像の活用と共に年間約 160 冊の課題図書（導入図書・応用図書）から学生一人が年間 6 冊を読むことを課題とし、これも授業展開の中で活用している。今後は、ソーシャルワークの専門教育の中で映像メディアと課題図書の効果的な活用法についてさらに研究し、実践現場に依拠した相談、援助・支援活動ができるようなソーシャルワーカー養成教育となるよう、その教授法・教材を工夫、開発していきたいと考えている。

参考文献

- 秋山博介・井上深幸（2007）『臨床に必要な社会福祉援助技術演習』弘文堂
井上輝子（1999）『ビデオで女性学しませんか』有斐閣
石川 実（2002）『現代家族の社会学』有斐閣
坂野尚美（2007）『こころをみつめる社会福祉の相談援助技術』高菅出版
ソーシャルワーク研究所編（2010）『特集 ソーシャルワークにおける演習教育』Vol.36（2）. 相川書房
古川繫子・汐見和恵（2007）『社会福祉援助技術Ⅱ』学文社
芸術教育研究所編（1997）『映画の中に福祉がみえる』中央法規出版
Resnic.Hy.（1994）Electronic Tools for Social Work Practice and Education. Haworth Press.

本研究は、2008～2009 年愛知淑徳大学の助成金を受けて行った研究成果の一部である。